

## 文章・談話研究

石出 靖雄

2016年から2017年にかけての文章・談話研究は、基本的には2015年までの流れを引き継ぎ、さらに隣接する分野とも関わりながら発展をとげた。

まず、語り論が文学と言語学の立場から研究されたことが注目される。2017年日本近代文学会秋季大会では「文学研究と言語研究のインターフェイス」というパネル発表がなされた。その発表者の一人である橋本陽介の(2017)『物語論 基礎と応用』講談社は、ジュネット以来の物語論を現代に応用できるようにわかりやすくまとめている。日本語学では、安井寿枝「山崎豊子『船場狂い』に見られる視点」『表現研究』105、木下りか(2017)「文学テキストと認識的モダリティ形式一形式の選択と使用から見えるもの」『表現研究』106が、小説における視点や文末形式について具体的なテキストを対象に検証している。

話し言葉の研究は、新しい考え方も提案され発展している。定延利之(2016)『コミュニケーションへの言語的接近』は、コミュニケーションを行動ではなく状況における影響の与え合いを意味するインタラクションとして捉えることにより、コミュニケーションにおける言語のあり方を明らかにした。泉子・K・メイナード(2017)『話者の言語学』くろしお出版は、談話を司る主体としての話者の重要性を指摘し、話者が場に応じて複数のキャラをもつことを具体的に論じた。キャラ・キャラクタについては、定延(2016)でも論じ

られており、金水敏等が指摘してきた役割語の研究が応用されている。

また、翻訳文に関わる研究も注目された。明治期の言文一致運動を経て近代文体が成立する過程において欧文翻訳の影響が指摘されているが、それを明らかにする翻訳語法や言文一致期に関する研究が多くみられた。齊藤美野(2017)「翻訳という言語接触と新しい文章の試み：明治期の文学翻訳の場合」『インターカルチュラル』15では、翻訳による言語接触が言語変化を引き起こし、言文一致に影響を与えたと指摘する。小西光(2016)「近代口語翻訳小説コーパス構築の概要と計量的分析」『国立国語研究所論集』11は、明治中期の翻訳小説と「近代口語文体成立期」の創作小説のコーパスを構築し、この二つの類似性を指摘した。澤西祐典(2016)「英文との対照から見た芥川龍之介の文体：三人称代名詞『彼/彼女/彼等』、文末詞『である』について」『國語國文』85-6は、芥川が翻訳語である三人称代名詞や「である」の使用に意識的であったことを指摘している。

文章論についての研究も地道に進んでいる。文章をまとまりだと感じさせるのは文章の結束性と一貫性だといわれるが、結束性を感じさせる指示詞の研究に杉山さやか(2016)「日英指示詞の現場指示用法と文脈指示用法に関する認知言語学的考察：身体性と情報構造」『認知言語学論考』ひつじ書房があり、指示詞の対立関係を日英比較により問い直している。

このように、文より大きい単位である文章・談話の分析は、文学や会話などの研究とも関係しながら、確実発展し続けている。(明治大学)